有朋自遠方来

２月25日、同志社大学文学部助教授・森浩一氏（考古学）がご来館、ＮＨＫテレビ番組「カメラリポート〈東京の鷹匠〉」のゲストとして、当館所蔵の「埴輪鷹狩男子像」と共にテレビカメラに収まりました。

森氏は最近の新聞紙上（昨年12月11日朝日新聞夕刊、３月３日サンケイ新聞）でも紹介された和歌山市・井辺八幡山古墳の発掘調査の功績者でありますが、今回、その際に発掘した鷹匠埴輪（本体は粉々になっていて、復原は出来ませんでした）の腕にとまっていたと考えられる、完全な姿の鷹（上・左の写真／手にもっている方）を持参され、当館の鷹（上記のものと向い合っている）と比較調査をなさいました。

新発見の鷹は６世紀初頭のものと考えられ、当館のものと比較しますと、いろいろ相違する点があって観る人々の興味をひきます。新発見のものには精悍さが目立ちます。日本には今も鷹による狩猟法は残っており、鷹には鈴をつける風習が伝えられていますが、新発見のものには鈴が無く、大陸から５世紀末に伝わったと考えられる古い鷹狩法の形式を伝えるものと思われます。当館のものは群馬県出土で、ほぼ完全に近い形に復原された鷹匠埴輪としては唯一の例で、新発見のものとは製作時代、出土地もそれぞれ異なりますが、この２つの小さな鷹の出会いには、何か古代のロマンへと駆りたてるものがあります。

季刊 美のたより No.20
昭和47年４月１日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.